「平成 30 年度北海道青年農業者会議」発表審査講評

全道各地から青年農業者 212 名、関係者 98 名、合計 310 名が集い、北海道青年農業者会議が開催されました。本会議では、青年農業者の皆さんが、日頃の営農活動や地域活動を通じて取り組んだプロジェクト 26 課題の成果が、４部門に分かれて発表され、活発な情報交換が行なわれました。また、アグリメッセージでは、発表者 11 名から、農業にかける熱い思いを込めた発表が参加者の心をとらえ、涙あり、笑いありの個性豊かな語り口に、会場はおおいに盛り上がりました。

ここに、発表された皆様の健闘を讃え、助言者及び審査員を代表して、感想や気づいた点を述べますので、今後のプロジェクト活動およびアグリメッセージの取り組みや発表の参考としてください。

■プロジェクト発表（26 課題）

プロジェクトは、青年農業者組織の結束を高めるための重要な活動です。

発表する内容は、「興味があり、関心の高い日常の営農や生活において問題点を発見し、解決するための目標を定め、計画的で合理的に実施し、これを通じて農業改良等に関する知識と技術を身につける実践的学習活動」です。

各自がプロジェクトの課題を持ち、それをクラブ活動の中でお互いに助け合って解決し合い、成果の交換を図ることを基本としています。

【各部門ごとの講評】

◇園芸・特産作物部門（７課題）

助言者：農政部生産振興局技術普及課　主査（普及指導）　山田　徳洋

①園芸・特産作物部門の７課題は、野菜生産の技術および経営改善を中心とした内容です。

その内容は、基幹品目の障害発生要因と技術改善および省力・低コスト栽培技術、重要害虫に対する防除技術の実証提案、有機栽培の排水改善対策、花きの新規作型導入による収益向上技術と、いずれも自家の経営改善や地域への波及が期待される活動でした。

②良かった点として、

・写真を効果的に使い、聞き手にも分かりやすいプレゼンテーションを行っていました。

・全ての発表が制限時間内であり、練習した努力の跡がみられました。プレゼンテーション能力の向上は大きな成果と感じます。

・発表内容は、各発表者が自らが直面している問題点の抽出と絞り込みを行い、それを地域課題解決の視点で発展させていました。一部では国際情勢を踏まえた課題設定がされていました。

・調査結果を整理し、生産性に加え経営経済的、労働的に検証したプロジェクトが多く、自家の経営への定着や地域内への波及につながると評価されます。

・複数年にわたるプロジェクトでは、単年では解決できなかった課題についても整理され、大きな成果と感じます。
・内容には直接関連しませんが、異なる２つの地域による合同プロジェクトの発表がありました。お互いに切磋琢磨し、創意工夫によるプロジェクト活動を期待します。
③今後改善してほしい点として、
・発表が単調で、「最も言いたいことは何か」メリハリをつけた話し方が不足していると感じます。原稿を見ないで声量にメリハリをつけ、時には手振り身振りを交え、重要な部分を強調するなど、聞き手に訴えかける発表を工夫してほしいと思います。
・成果が明確である反面、背景－技術導入の目的－到達目標－活動経過（連携・役割分担を含む）－結果－考察－今後の課題といったストーリー性が不足していると感じます。また、苦労した点にもふれると良いと思います。
・プレゼン資料と紙配付資料に一貫性があると、聞き手がより理解しやすくなります。
・情報量を詰め込みすぎないように、図表を作成する必要があります。
④最優秀賞は「潰してこい！～にらのネギコガ防除プロジェクト～」知内町４Ｈクラブの大嶋　徹さんの発表です。
・発表内容は、地域の基幹作物である「北の華ブランド」にらにおいて、生産性を低下させている重要害虫「ネギコガ」の発生消長解明と改善防除対策の提案です。
・良かった点は、発生生態が解明されておらず対策が未確立の重要害虫であり、優先かつ緊急性の高い課題を取り上げたこと。そして課題解決の方策が明確で、成果を地域全体に提案し、栽培技術の一助として反映されたと高く評価されました。当初から波及性を意識し、計画的に緻密な調査を継続し、結果を地域へフィードバックするとともに、アンケート調査から成果を客観的に評価し次年度の参考にするなど、「地域と共に」進める取組に共感がもてました。
　防除対策により「地域生産量の向上につなげた提案力、波及力は大きく、地域に対する貢献度は極めて高い」と評価されました。
　発表態度も堂々としており、ポイントを強調した力強い説明に好感がもてました。
⑤以上ですが、いずれの発表課題も継続的な活動により更に発展可能で、自家の経営・労働改善や地域への貢献度が高い活動です。今後も皆様方の若い視点と、地域を動かす行動力に大いに期待しております。

◇土地利用型作物部門（４課題）

　助言者：農政部生産振興局技術普及課　総括普及指導員　石川　卓治

①土地利用型作物部門は、作物生産の技術および経営改善を中心とした内容です。
②今年は水稲１課題、小麦２課題、小豆１課題の計４課題でした。水稲の課題は、密苗による移植作業の省力化対策。小麦は適正追肥による品質の安定化とＩＣＴを活用した可変施肥技術の実践。小豆は狭畦栽培導入による省力化対策についての内容でした。
③内容を具体的に見ると、４課題中３課題は、労働の軽減に関わる省力化技術の実戦となっており、持続的農業の展開を意識した取り組みとなっています。また、ＩＣＴを活用し

た取り組みでは、これからの新しい農業形態の参考となる内容でした。小麦の適正施肥の実証では、近年の気象変動に対応した、きめ細やかな技術により、収量、品質における安定化が示され、地域の施肥体系を見直すきっかけとなるものと感じました。

いずれの課題においても、我が家の問題点の改善に留まらず、地域の実態も十分把握しながら明確に課題設定がされていました。課題解決活動では、解決するための手法（密苗、基本施肥技術の確認実証、ＩＣＴ、狭畦密植）が適切に活用されていました。改善結果については経済性も含め、具体的なデータで示されており、とてもわかりやすいものでした。また、家族や仲間、地域関係機関とも話し合いが持たれており、今後、地域で共有化され波及していく課題であったと思います。さらに、次年度に向けた課題もしっかり検討され、本年度で解決できなかった課題について整理されており、今後の大きな成果につながっていくと感じました。

発表態度は、プロジェクト実践による達成感や自信に満ちた雰囲気が伝わってきました、また、話すスピードや声の大きさの強弱もあり、聞きやすかったです。発表スライドは話す内容を効果的に演出できていました。

④今後改善してほしい点や要望は、スライドの表や図をポインターで指しながらの説明等の工夫があると解りやすいと感じました。また、聴く方としては、発表地域の事情や説明があった方が、地域をイメージしやすいので付加情報がある良いと思います。発表時間や態度も評価の対象となるのでご留意ください。プロジェクト活動では、やることが目的になってしまいがちです。きっかけは何だったのか常に原点に立ち戻り、学べたことは何だったのかを整理することが重要と考えます。

⑤審査に当たり、本年度は最優秀賞は選考せず、優秀賞を３課題としました。審査対象は農業大学校の発表を除き３課題でした。これら３課題については前述にも示したとおり、各クラブ員、地域にとってとても重要な課題でありました。しかし、取り組んだ技術から作物に与える影響について、もう少し考察が必要であったと評価しました。結果だけではなく、その過程にプロジェクトとしての意義があると思います。

発表されたプロジェクトについては、いずれも１年目の課題であり、次年度も継続していただき、当初思い描いた目標に向かって、多くのことを学び成果をしっかり出し、地域の人達にも広く伝わるような完成度の高いプロジェクト活動を展開してください。そして、今後も地域を元気にする活躍を期待します。

◇畜産経営部門（６課題）

助言者：農政部生産振興局技術普及課　総括普及指導員　寺田　浩哉

①全体について

今回の発表は６課題でしたが、それぞれのプロジェクト内容は良くまとめられ、取組に対する特徴がよく分かる発表会でした。発表態度も良く、時間内に終了する発表も多く、日頃の練習の成果が現れていたと思います。

青年らしくチャレンジ精神に満ちた発表もありました。また、経営を学ぶ課題もあり、将来の経営移譲を見据えて力を付ける取組は非常に良い活動だと思います。

また、調査項目や方法が適切に示されている発表も多く、獣医師や指導機関の助言をしっかり受け止め、プロジェクト活動に繋げていることも評価できます。

一方で、10 分という短い発表時間の中で、実施した活動内容を幅広く説明するためインパクトが薄い内容になってしまい、「最も言いたいことは何だったのか？」と参加者に疑問を与える発表もあり、課題と活動の焦点を絞ったメリハリのある発表が今後望まれます。また、タイトルと内容が合致していない発表や背景・実行・結果・考察が一連の流れでストーリー性を持ったまとめ方や発表が不足している課題もあり、プロジェクトをまとめる上で今後特に意識して欲しい部分です。また、今後成果の発展に期待できそうな課題が幾つかあったため、プロジェクトの継続について検討願えればと思います。

②最優秀賞は、「活躍する初産牛は子牛から」を発表した、大樹町　山下　陽子さんです。

・原稿を読まずしっかり前を向き、自分の言葉で語りかけ、その表現力に会場の仲間達が思わず聞き入ってしまうほど素晴らしい発表態度でした。

・実家に就農し、女性が営農をするメリット・デメリットが理解できました。

・実家に就農後最初に取り組んだ繁殖管理で牛群の成績が向上しましたが、初産牛の繁殖成績に疑問をもち、現状を把握をしたところ、過密な飼養状況と初産牛が小さい事が要因と突き止め、ほ育～育成期（４ヵ月齢）の飼養管理の見直しを行って、初産の大型化を実現しました。その結果、初産牛の繁殖成績が向上し、初任販売頭数の増加へと繋がっています。現状をしっかり把握し、問題点を見て仮説を組み立て実行に移すなどプロジェクトの経過が明確です。

・また、会場からの質問にも適切に回答しており好感がもてました。

・提出資料、発表資料はビジュアル化されており、見やすくなっています。

③今後改善して欲しい点は

・図表の注釈等、図表が何を意味しているか理解できるよう精査が必要です。

・冒頭、背景で説明された施設の過密状態にインパクトがありました。初産牛を改善後、更に良い結果を得るために既存施設の改善方向が考察の中にあるとよいと思われます。

・制限時間内の発表を厳守することです。

◇地域活動部門（９課題）

助言者：農政部生産振興局技術普及課　主査（普及指導）　石岡　康彦

①全体について

・地域活動部門は、青年学習グループがプロジェクト活動や学習活動のなかで地域へ働きかけ、自らのグループの活性化を図る活動を発表する部門です。

・今年は、「地産地消や消費拡大・特産物づくり」等の活動が６課題、「組織活動のあり方や人づくり」を意識した活動が３課題の合計９課題でした。

・「地産地消や消費拡大・特産物づくり」の活動では、自らが生産した農畜産物を加工したり、販売することを通じて、農業や地域の魅力を伝え、地域農業のサポーターづくりを進めていました。

加工や販売の活動を進める中で、自分たちの能力を高めるため、各種の専門家から学び、

成長する姿を見ることができました。
　これらの活動の中で、消費者から「おいしかった」「売ってほしい」などの声、異業種とつながり活動が発展することが、プロジェクトに取組む皆さんの自信につながっていること、さらに皆さん自身が農業や地域の魅力を再発見していることが理解できました。
・「組織活動のあり方や人づくり」では、４Ｈクラブ存続のため、クラブ員の勧誘や魅力ある活動内容を自ら考え、結束力と行動力で意欲的に活動する青年たちの姿に明るい将来を見ました。
　２つのプロジェクトとも、明確な目標を設定し、多くの人たちと活動目標を共有しながら取り組むことで、大きな成果を上げていることが分かりました。これから活動が継続されること、ステップアップされることを期待します。
②最優秀賞は「七飯のねぎのブランド化をさせたい件～カルソッツ祭り IN 道の駅を添えて～」七飯町４Ｈクラブ山本　翔さんの発表です。
・タイトルから内容が想像できる、的確なタイトル名でした。顔を上げ落ち着いた語り口調で、聴衆に対し自分たちが取り組んできたことがしっかりと伝わりました。特産長ねぎを若い力で強力に PR し、ブランド化に向けて活動していく姿がよく伝わる発表でした。
　道の駅開業に合わせ、スペインの祭りをイメージしたイベント開催や地元調理師専門学校と連携した６次産業化へのアプローチ、マチを印象づけようとするお土産の開発など、企画力の優れた点と行動力が高く評価されました。その活躍ぶりに地元農協も期待を寄せ、商品の顔となる大切なステッカーづくりを依頼したと感じました。今後も、地域を元気にし、地域農業を盛り上げる活動に期待します。

◇プロジェクト発表の小括
　プロジェクトは４Ｈクラブ活動の基本で、将来地域のリーダーとなる皆さんにとって最も大切なことです。今回はそれぞれのクラブ員同士や関係機関等と十分な協議と連携により課題解決を行い、大変参考になる発表でありました。課題解決にあたっては、クラブ員はもとより、市町村やＪＡ、普及センター等、地域の関係者、地元企業、各種の専門家などの協力を得ながら進められていることが多くの課題でうかがわれました。地域からの期待も大きいものがあると想像されます。
　我が家の経営成果に直結するプロジェクトでは普及センターなど関係機関の支援を仰ぎながら成果を確かめ、家族や地域の理解を得ることで、可能な限り経営全体、地域全体での取り組みに発展するよう期待したいと思います。
　今後も仲間や関係機関、地域の皆さんと連携を図り、地域活性化のため活気ある活動が継続されることを期待いたします。

■アグリメッセージ（11 課題）
　助言者代表：農政部生産振興局技術普及課　首席普及指導員　三宅　俊秀

①アグリメッセージは、日頃から取組んでいる農業経営、地域・クラブ活動やボランティ

ア活動などの体験を通して､感じていることや青年農業者として果たす役割などについて、訴えたいことを自分の言葉で７分間にまとめて表現する場です。
②本年は 11 振興局の代表から発表がありました。発表者は全員男性で、年齢は別海農業高校専攻科に通われている 19 歳から新規参入者の 41 歳と幅広く、それぞれが自分自身の意見に自信を持って発表しているメッセージが数多くありました。
③発表の良かった点として
・発表は発表者の自らの農業経験に基づいた内容で、今おかれている現実を直視し、自分たちがこの現実を変えていくんだという強い意志、また家族や周囲への感謝の気持ちが伝わってきました。
・農村地域の振興に積極的に取組むひたむきな姿勢や、農業の素晴らしさを広く伝えたいという地道な取組みにも感銘を受けました。
・発表方法では、原稿を読まないで正面を向き、大きな声で聴衆へのアイコンタクトに配慮した発表でした。
④最優秀賞は「田舎の農生活」を発表した、蘭越町４Ｈクラブの木村政義さんです。
　都会での生活を通じて、実家のある農村地域の良さを再発見し、農業や田舎暮らしの素晴らしさを強くアピールした発表でした。
　都会では便利で楽しい生活を送れるものの、仕事以外での人との交流が少なく、精神的な疲れを感じたことが多かったが、故郷に戻った時に改めて農村地域の温かい「人とのつながり」を強く実感されたこと、このような温かな「人とのつながり」の良さを都市部などに広く発信していくことで、農村の魅力を多くの人に伝えていきたいという、熱い思いがしっかり伝わってきました。
　発表態度は､声量もあり抑揚の効いた語りかける発表で､聴く者を引き込む内容でした。今後、発表を充実していく上では、田舎での活動内容や「人とのつながり」の部分をもう少し具体的にしていくことで、更に田舎暮らしの豊かさ、楽しさをアピールできると良いと思います。

◇アグリメッセージの小括

　本年は、全道の振興局から 11 課題が発表されました。農業者９名、ＪＡ職員、別海高校農業特別専攻科の方から、それぞれの立場で、農業に対する熱き思いを発表していただきました。
　自らの夢、家族経営の夢、地域農業を仲間とともに新たなステージへ展開させていきたいという皆の夢、震災や怪我を乗り越えて営農に励む姿など、個性のある内容が多くありました。夢の提案方法も様々で、発表者の独創性豊かな内容構成に感心させられました。
　大勢の人前で発表することはとても緊張するものですが、皆さん堂々と発表されていました。
　しかし、数課題で規定の発表時間を超えていましたので、規定の時間内でアピールできるよう練習をお願いします。また、声量に注意し、原稿を見ないで聴衆を見ながら身振りを交えたメリハリのある話し方での発表をお願いします。
　今回のアピール賞の選考においては、相対的な発表評価ではなく、聴衆に対するアピール性の高い内容の課題を選定させていただきました。また、ドリーム賞では、若手農業者

らしい大きな夢のある課題を選定させていただきました。
今後も青年農業者が将来の夢と希望を熱い言葉で発信する場として、本会が更に盛り上がる事を期待しております。

■総括

日本農業は、TPP11 協定の発効、日 EU・EPA の発効を受け、多くの品目での関税引き下げ、撤廃が進められ、新たな国際環境下において競争力ある農業づくりが重要となるなど、転換期を迎えています。
このような情勢のなか、発表者からは安全・安心な農畜産物生産や新たな価値を創造する取組、省力・低コスト生産、ＩＣＴを活用した精密農業の推進など、新たな可能性や地域農業の維持発展の取組が報告され、全道各地の農業の力強さを感じました。
今回のプロジェクト発表では、時代や農業情勢の変化に対応した課題をテーマとした課題が多くありました。そのどれもが計画的に自らの経営の課題解決に止まらず、地域全体の課題解決の視点を持って取り組まれていました。
これらのプロジェクトの取組姿勢は、今後の皆さんの長きにわたる営農に大きく役立つものと確信しております。
プロジェクト発表やアグリメッセージを通じて、自分達の経営を改善していくこと、自らの考え、夢を発表していくことは、参加者や地域の仲間との情報共有や意見交換によりお互いの成長を促すものです。そして、これらの活動は北海道農業の発展へとつながっていくものと思います。
プロジェクト活動などの内容を多くの人に理解してもらうためには、課題の背景や活動経過、成果内容についてしっかりまとめることが大切です。
また、めまぐるしく変化する農業情勢を押さえつつ、普遍的な農業生産における課題の解決、新たなチャレンジなど、今後、どんな行動が必要なのかを家族や仲間とともに考えていくことが重要です。
次年度に向け、すでにスタートしている取組や課題化が検討されていると思います。
これからも北海道農業の役割は、豊かな自然と広大な土地資源を生かした消費者が求める安全・安心な農畜産物の生産です。さらに、それらの活動で経営を維持発展させていくことが重要です。
自分達がやるべき事にしっかり取組み、仲間とともに総合力を発揮していくことが重要と考えます。
本大会は多くの運営に関わる裏方の皆さん、発表者、参加者、関係者の協力によって運営されています。運営にあたった北海道４Ｈクラブ連協、運営補助員、関係者の皆さんのご尽力に敬意を表します。大変お疲れ様でした。
次回からは、年号も変わり、運営方法も変わってきます。今後もこのようなプロジェクトや意見発表の場が青年農業者の手によって末永く存続されることを期待しております。

助言者・審査員代表：北海道農政部生産振興局技術普及課
首席普及指導員　　三宅　俊秀